

第 35 回国際神経精神薬理学会世界大会 開催結果報告

1 開催概要

- (1) 会 議 名 : (和文) 第 35 回国際神経精神薬理学会世界大会
(英文) 35th International College of Neuropsychopharmacology World Congress
(略称: CINP2024)
- (2) 報 告 者 : 第 35 回国際神経精神薬理学会世界大会組織委員会委員長 池田 和隆
- (3) 主 催 : 日本神経精神薬理学会、日本学術会議
- (4) 開 催 期 間 : 2024 年 5 月 23 日 (木) ~ 5 月 26 日 (日)
- (5) 開 催 場 所 : 東京国際フォーラム (東京都千代田区)
- (6) 参 加 状 況 : 53 カ国・地域 2,599 人 (国外 1,249 人、国内 1,350 人)

2 会議結果概要

- (1) 会議の背景、日本開催の経緯 :

国際神経精神薬理学会 (CINP) 世界大会を日本 (日本神経精神薬理学会) が開催するのは、1990 年京都で行われた本邦初開催以来 34 年ぶりで、本学会が推進する取組を海外に発信する大きな機会であった。

近年、日本国内のみならず全世界的に精神疾患の多様化と増加が見られる中、その重要性は年々高まってきている。本大会は隔年で様々な国で行われてきたが、2021 年より毎年の開催となった。近年アジア圏での開催時に参加者数が増加し、盛況である傾向が強く、過去の大会参加状況から考えても多くの海外専門家の参加が見込まれることもあり、各国からのアクセスの良い東京での開催を計画した。CINP 傘下学会である日本神経精神薬理学会が担当し、東京での初開催とすることが 2021 年 10 月 CINP 執行委員会において決定された。
- (2) 会議開催の意義・成果 :

CINP2024 を開催し、世界各国から精神医学、薬理学、脳科学の研究者、臨床薬剤師等が一堂に会して、神経精神薬理学分野の基礎研究・臨床研究の推進や産官学連携の取組について議論を行うことで、日本神経精神薬理学会が推進する、日本における中枢神経薬の開発と適正使用に向けた取組を世界に発信できた。
- (3) 当会議における主な議題 (テーマ) :

メインテーマは「New wave of Neuropsychopharmacology toward wellbeing (ウェルビーイングに向けた神経精神薬理の新潮流)」である。近年の科学技術の発展に伴い、精神疾患における臨床現場への応用を目指す取組は、世界各国、特にアジアにおいても盛んに行われるようになり、国際神経精神薬理学会の評議員にもアジアの研究者・臨床家が多く選出される状況となっている。この世界主要各国並びにアジアの企業、研究・医療機関、規制当局に所属する専門家が本大会で一堂に会し、中枢神経薬の開発と適正使用に向けて、基礎研究・臨床研究の推進や産官学連携の枠組み作りについて議論した。
- (4) 当会議の主な成果、日本が果たした役割 :

COVID19 感染拡大後、久しぶりの本格的な face to face の国際交流の場となり、アジア

圏のみならず世界 53 カ国・地域から多様な関係者が集い、研究発表と活発な討論が行われた。特に近年、世界的に大きな注目を集めている神経精神疾患治療に関して、国内外の最新の知見に関する活発な議論が行われ、日本が積極的に開発を進めている中枢神経系治療薬の研究成果は海外研究者に大きなインパクトを与えた。

(5) 次回会議への動き：

次回会議は 2025 年 6 月 15 日－18 日にメルボルン(オーストラリア)で開催される。アジア圏での研究が盛んに行われていることを受け、アジア神経精神薬理学会(AsCNP)との合同大会(CINP-AsCNP2025)として行われることが決定した。

(6) 当会議開催中の模様：

1,200 名を超える国外からの参加があり、世界各国の研究者との自由な交流を行える貴重な機会となった。公募したシンポジウムには 88 件の提案があり、その中から厳選した 24 件のシンポジウムが行われた。また、選から漏れたシンポジウムの中にも素晴らしい提案が多かったことから、Spotlight Session として 10 件を採択し、それぞれの会場で議論は盛り上がった。さらに、一般演題としては過去最多の 717 件が採択され、会場は人で溢れ、全世界に向けて広く学術研究、教育の機会を提供することができた。

(7) その他特筆すべき事項：

日本開催の決定にあたっては、日本が神経精神薬理学分野における世界的な発展・普及への貢献が抜き出ていること及び東京が世界的にも魅力的な都市であり、かつ、国際会議の経験豊富なこと、サポート体制がしっかりしていることがポイントとなった。2019 年の誘致活動開始以降、2024 年の大会開催まで、世界で開催された関連国際会議において継続してプロモーションを実施した。それらに際して、日本政府観光局(JNTO)からいただいた有形無形のサポートが、海外研究者へのアピール度向上に有益であった。

3 市民公開講座結果概要

(1) 開催日時：2024 年 5 月 26 日(日) 13:30－15:35

(2) 開催場所：東京国際フォーラム

(3) 主なテーマ、サブテーマ：「アディクションの克服に向けて」

(4) 参加者数、参加者の構成：前後半 2 部制、延べ参加者数 371 名、一般市民、医療従事者

(5) 開催の意義：

アルコールや覚醒剤などに対する物質依存と、ギャンブル障害やゲーム障害などの行動嗜癖の両者を含む概念であるアディクションは、本人の心身や社会活動に影響する疾患であり、世界的に社会問題となっている。これらの依存症は、快不快や好き嫌いの情動が密接に関わっているとされているが、メカニズムの解明や問題への対策が求められている。日本には研究拠点がなく、欧米ではアディクションに特化した巨大な研究所が設置されているなど、アディクション研究で大きな差がつけられてきた。近年、日本学術会議にアディクション分科会が設置され、アディクション研究の在り方について検討し、2020 年に発出された提言を踏まえ、国立精神・神経医療研究センター内にアディクション研究センターが設置される予定となった。アディクション研究の拡充による学際的、総合的なアディクション学の創成と発展が望まれている。本大会の市民公開講座では世界トップクラスの研究者の話題提供を元に、産官学の有識者が集まり、市民の方々と一緒に、今後のアディクション対策について議論を行った。

(6) 社会に対する還元効果とその成果：

市民からの関心が非常に高いアディクションに関して、第 1 部では国際的に著明な研究者から最新のアディクション治療に関する研究を分かりやすく講演いただき、第 2 部では産

官学のそれぞれの立場からアディクション対策に関する講演をいただき、その後に演者とパネリストを交えて様々な立場からアディクション克服に向けた議論を行ったことで、市民への有意義な情報提供を行うことができた。

(7) その他：

盛山正仁先生（衆議院議員、文部科学大臣（当時））に第2部座長をお願いし、中谷元先生（衆議院議員、依存症対策議員連盟会長）にも講演いただくこととなり、多くの市民にご参加いただけた。

4 日本学術会議との共同主催の意義・成果

開会式において、日本学術会議日比谷副会長の挨拶には大きな関心が寄せられ、また日本学術会議の方々にも当学会とその研究領域についてご理解を賜ったことに大きな意義があったと考える。さらに、総理メッセージを頂けたことで、大きなインパクトがあり、本大会が国にサポートされていることを国内外関係者に強く印象付けるものであった。会場費等の援助を受けられたことで、会議本体により多くの資金を費やすことにつながり、充実した内容を参加者に提供することができた。さらに、市民公開講座を開催し、広く市民へ成果を還元できたことも、共同主催の成果であったと言える。

メイン会場ステージ



開会式



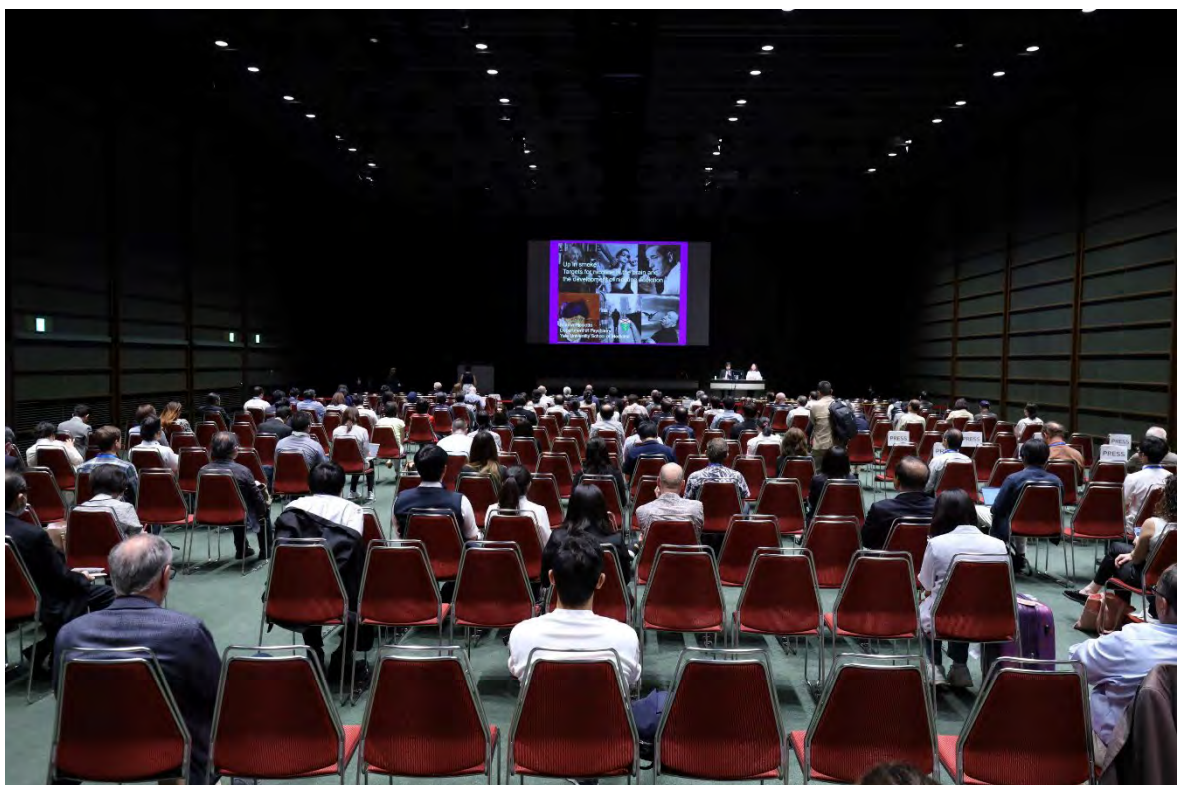
開会式参加者集合



ポスター会場



市民公開講座



市民公開講座 パネルディスカッション

